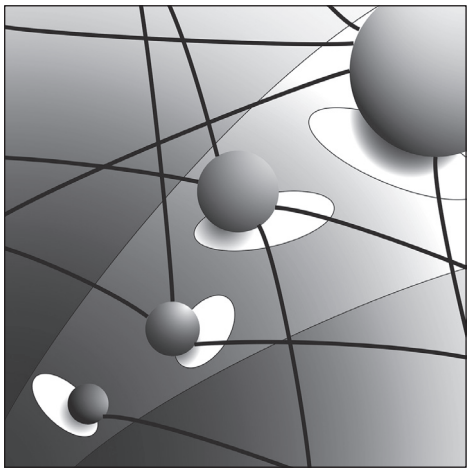
「技能と技術」誌表紙デザイン 最優秀賞受賞者および指導者インタビュー

「技能と技術」誌 編集事務局

1. はじめに

本誌の表紙を飾っていますデザインですが，毎年変わっていることをご存知でしょうか？この表紙デザインは本誌編集事務局が作成しているものではありません。毎年，本誌2号（6月発行）でご案内しておりますが，全国の職業能力開発施設および大学，工業高校，専門学校等のデザイン系学科の方を対象として，広く募集しており，ご応募いただいた多くの作品の中から「最優秀賞」に選出されたデザインが，翌年の表紙デザインとして採用されます。

今年度の表紙デザイン選考会（平成29年10月開催）では，宮城県立仙台高等技術専門校広告看板科の村川拓大さんの作品が最優秀賞に選出され，本誌4号（平成29年12月発行）にてお知らせしたところです。



平成30年「技能と技術」誌表紙デザイン
最優秀賞作品

表紙デザインとして作品を使用する場合，各号ごとに色を変えておりますので，今一度，オリジナルの作品と見比べてみてください。

さて，12月某日，本誌編集事務局は仙台市内のJR仙石線福田町駅から徒歩5分という恵まれた立地条件にある同校を訪問し，村川さんおよび指導担当の先生にインタビューを行いましたので報告します。

2. 宮城県立仙台高等技術専門校広告看板科

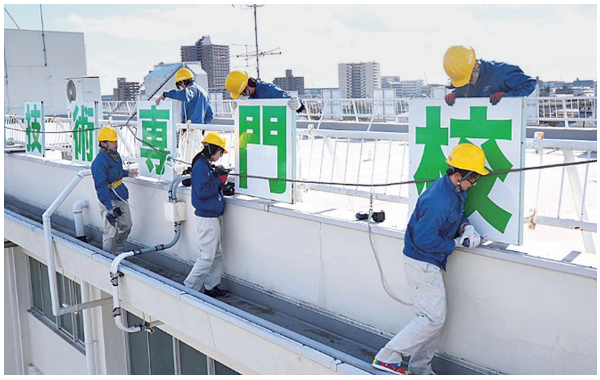
同校は宮城県により昭和39年に設置され，県内の中核的施設として数多くの技能者を育成しており，その数なんと約12,700名に上ります（平成28年度まで）。現在は「機械エンジニア科」「電子制御システム科」「自動車整備科」「電気科」「設備工事科」「建築製図科」「塗装施工科」「広告看板科」の8科があり，平成29年3月卒業生では全体で95.2%の高い就職実績を残しています。

宮城県立仙台高等技術専門校の外観

村川さんが学んでいる広告看板科は，宮城県内に5校ある高等技術専門校の中で唯一，同校にのみ設置されている学科になります。屋内外に設置する看板の設計・デザイン・製作・取り付けに必要なスキルを1年間かけて学び，「看板屋」への就職を目指します。

実は同校の屋上に設置されている看板は，学生たちが製作・取り付けを担当しているそうです。まさに実学一体のカリキュラムですね。

看板製作の様子



製作した看板の取り付け作業の様子

3. 受賞者インタビュー

今年度の表紙デザイン募集には全国から144点の応募があり，厳正なる審査の結果，村川さんの作品が最優秀賞に選出されました。訪問当日には，ご多用の中，寺嶋校長をはじめ，中澤副校長，石川先生にも出席していただき，校長室にて授賞式も行いました。授賞式のあと，村川さんとご指導いただいた石川先生にインタビューを行いました。

左より寺嶋校長，最優秀賞の村川さん，
指導担当の石川先生，中澤副校長

ーまずは受賞おめでとうございます。最優秀賞と聞いてどんなお気持ちでしたか？

最初，先生から話を聞いた時には「え?!」と思いました。これまでの受賞作品を見ていたので，自分が作ったシンプルな作品が選ばれたことに対し，「なんで？」と思いました。最初は実感がわかなくて，ホームページにあった表紙デザイン選考結果の記事を見ているうちに，だんだんと実感がわいてきました。

ーどのようにデザインができていったのですか？

まずはラフスケッチをしたのですが，今回の作品とほぼ同じものを最初に描きました。また，コンセプトについても一緒に思いつきました。その他にも3パターン描きましたが，複雑すぎると感じて，最初に描いたものを選びました。

グラフィックソフトでの作業に入ってからは，「こうした方がもっとよくなるかな？」と試行錯誤しながら作りました。実はグラデーション機能について学んだ直後だったので，グラデーションを多く使っています。

ー「技能」「技術」という言葉の意味については調べましたか？

まずはそれぞれの意味について自分なりに調べてみました。そこで「どちらが土台になるのだろう？」と思いました。人それぞれ考え方は違うと思います

が，自分は「技能がしっかりした上で技術を磨いていく」というふうにとらえて，技能を土台にすることにしました。

ー作品の要素には，どのような意味が込められているのでしょうか？

最初に「不安定さ」を出したいと思いました。自分がまだ未熟で技術をそれほど持っていない。ぐらついている技術の中でどう成長していくかを円や球体を使って表現しました。また，技術が増えれば能力も増えると考え，能力が増えていく様子を線で表現しました。

ー制作期間は？難しかったところはどこですか？

ラフスケッチにはそれほど時間はかかりませんでした。パッと思いついて描いたため，1時間ぐらいだったと思います。グラフィックソフトでの作業に入ってからは，2日間かけて作品を完成させました。

球体の影や光の位置の調整には時間がかかりました。線の配置のバランス，特に交差部分についてはとても悩みました。それから，背景のグラデーションと影の調整も難しかったです。

最優秀賞の村川さん

ーせっかくの機会ですので，同校へ入学するきっかけについてお聞かせください。

この学校に入るきっかけは，小学6年生のときに父親が教えてくれたことですね。インターネットで看板の勉強ができる学校を調べてくれて。父親のおかげですね。

実は家業が看板屋で，祖父と父親の仕事をずっとそばで見ていて，「すごいな」と思っていました。幼稚園の年長のときに，簡単な作業ですが初めて仕事の手伝いをして，「楽しい」と感じました。このときの気持ちが看板屋への就職を目指す原点になったと思います。

中学生になってからも手伝っていたのですが，本格的に看板作りをさせてもらったのは高校3年生ですね。ますます看板屋に対する思いが強くなりました。

その後，やはり基礎からしっかり学ぼうと思い，この学校の見学会に参加することになりました。広告看板科に入った時に看板がたくさん並んでいる様子を見て，「やっぱり自分のやりたいことはこれなんだな」とあらためて思いました。

ー家業が看板屋とのお話でしたが，今後の展望についてお聞かせください。

卒業後は宮城県内の企業に就職します。自分の目標としては，まずは5年間やってみて，自分が納得できる技術が身についていたら，父親と一緒に仕事をしたいと考えています。

今後，店舗看板だけではやっていけないと考えているので，違うことにも取り組めるよう，就職先でたくさんのことを学び，自分のものにしたいと思います。

ー最後に今後応募されるみなさんに向けて，一言お願いします。

作品を見てくれた人にコンセプトを想像させることができるようなものが作れるとよいですね。それから，今回の作品にも「自分はこれからどんどん大きく成長していく」という思いを込めているのですが，デザインがシンプルでも複雑でも，何か一つ伝えたいメッセージを含めることができれば，きっとよい作品になると思います。

4. 指導者インタビュー

ー毎年応募いただきありがとうございます。最優秀賞作品が生まれるまでの経緯をお聞かせください。

丸，三角，四角，線などの要素が造形やデザインにおいて，「それが何を意味するか？」「それをどのようにするとどう見えるか？」ということを考えさせるところから始めていましたが，奥行きをさほど感じない作品に仕上がっていましたので，最初に見たときは衝撃を受けました。私であれば，立体的に見えるような効果を平面で出そうと，もっと手を加えますので。

実は今回応募したすべての作品については，一切手を加えていません。学生たちに任せてみました。これまでは「こうした方が，動きが出るよね？」などと指導することもありましたし，コンセプトの意味がわからないときは文章の添削もしていました。

今回は，グラフィックソフトであれこれ修正を加えるなら，その前にラフスケッチに描き加えること，ラフスケッチを完全再現することだけは徹底させました。

看板というものはパッと見て何が書いてあるかわからないといけないため，「少ない要素でどう表現しよう？」と考えながら作品を生み出したと思います。

作品を見ながら制作の様子を振り返る
指導担当の石川先生

きっと，デザインの専門家が見ると「おかしいよね？」と思われるようなものが少なからず含まれていたと思います。ただ，やっぱりこのような評価をいただきますと，基本は基本として，それをどう飲み込んで表現するかは，まったく別の話であるということに，逆に気づかされました。センター揃えになってないといけないとか，シンメトリーにしなければならないとか，頭でっかちになって考えて押し付けがちですが，そういうことを一切考えないで自由な発想で作っていることが私にとっては「新しい」と感じました。

また，全員そうでしたが，余白を怖がらなかったですね。普通であれば，余白に何かを入れたがるのですが。無理やりうめようと考えずに素直に作ったことで余白がうまれ，この余白があるからこそ作品が生きていると感じました。あと，看板屋では縁起物なので，斜めにするのであれば右肩上がりしなさいと伝えていたのですが，それが今回の作品に影響したようですね（笑）。

ー表紙デザイン募集についてですが，広告看板科での訓練に役立っていますでしょうか？

グラデーションやレイヤーの扱いなど，グラフィックソフトのスキルを確認することができます。それから，デザインや造形について考えるきっかけになりますし，また，デザインの難しさを気づかせることもできます。自分が考えていることを限られた条件のもとで表現することはとても大変です。あと，自分の作品を評価してもらえることも大きいですね。

訓練において役立っていますので，このまま継続してほしいと思います。

ー村川さん，石川先生，お忙しい中インタビューを受けていただきありがとうございました。インタビューを通してお二人の喜びを間近で感じることができ，本誌編集事務局にとっても大変有意義な機会となりました。また，石川先生曰く，今回の受賞は同校にとって初の快挙とのことでした。受賞の喜びは同校のFacebookにも掲載されていますので，併せてご覧になってください。

https://www.facebook.com/sendaigisen.pref.miyagi/
※2017年12月19日に投稿されています